

読上競技コレクション 総集編

千般計校

北海道 西村 友幸

10 年来の夢が叶い、『サンライズ』誌で 1 年以上にわたる連載を受け持つことができた。かなりの部分は新型コロナウイルスのおかげである。しかし、感謝の気持ちが伝わる相手ではないし、もし伝わる相手だとしたらお礼がてら一発お見舞いしたいところだ。

ファッションショーでは最後に、デザイナーが登場して観客に挨拶するのが習わしとなっているようなので、私も真似してみる。今回も見開き 2 ページ分をいただいた（いつの間にか 32 - 33 ページが“読みコレ”の定位置になった）。挨拶だけではとても埋まりそうにないから、これもファッションショーでしばしば見られるように、出演したモデルたちに勢ぞろいしてもらって一緒にランウェイを歩くことにしたい。

* * * *

#1「一人二役モデル」(2020 年 5 月号) は既発表作品ということもあって、競技方法の解説は手短かに済ませ、モデルが誕生した前後のエピソードの記述に紙幅を割いた。その延長線上で珠算競技のプロリーグ構想にも言及した。自分としては構想を「ぶち上げた」つもりはない。とても現実主義的なプランだと思っている。

試合への出場給（ファイトマネー）も得るには得るが、教場（ジム）を運営し、授業料収入で主たる生計を立てる。こういったハイブリッド型の「プロ」選手の先行事例は総合格闘家である。実を言うと、私が新たな珠算競技のデザイン活動に入れ込むようになったのも、ある総合格闘家の影響なのであった。彼の名前は佐山聡^{さとる}。1980 年代前半

に「タイガーマスク」として新日本プロレスのリングを縦横無尽に駆け巡ったスーパースターである。マスクを脱いだ後の佐山氏は、理想の格闘技づくりに没頭し、アイデアをワープロでひたすら文書化していった。多感な時期の私には、そんな佐山氏がとてもまぶしく見えた。

#2「算読連携モデル」(2020 年 6 月号) は、読み手であるコーチと置き手である生徒が協力してご名算獲得を目指すゲームである。何のことはない、教場での日ごろの練習における役割関係を競技大会に持ち込んだだけなのだが、練習風景を試合で見せるという発想の源泉は、上述の佐山聡も「スーパータイガー」のリングネームで参戦したプロレス団体 UWF にある。UWF の選手たちは、道場で行っている関節技の取り合いを試合で再現し、既存のプロレスに飽き足らないファンの心をとらえたのである。

#3「一人二口モデル」(2020 年 8 月号) は、鬼ごっこ^{ごっこ}のたとえ話で始まる。「鬼」と聞くと今や誰しも『鬼滅の刃』を連想するはずだが、#3 を執筆していたころの私はこの漫画のことを一切知らなかった。人間（＝読み手）が自らに迫りくる鬼（＝置き手）を討つための「刃」に相当するソロバン道具は何か。突き詰めれば読みコレに新しい仲間を加えられるかもしれない。

#4「行間読上モデル」(2020 年 9 月号) は型破りな半面、読みコレ全 11 作品の中でおそらくもっともシンプルである。袖を通してみたという読者も多数いてくれるのではないだろうか。感想を聞かせてもらえるとありがたい。

#5「^{ふたやれんが}双八連歌モデル」(2020年10月号)が誕生したのは令和2年の新春のことである。NHK BSプレミアムの「百人一首～藤原定家 三十一文字の革命～」という番組(1月4日放送)を視聴したことが決め手となった。

このような経緯を述べる代わりに、#5の冒頭には「珠算ひとすじ」と題する詩を載せた。作者の西村道子は私の母である。母によると、それは昭和49年、全日本通信珠算競技大会からの帰り道での出来事だった。バスターミナルに向かって生徒たちと歩道橋を歩いていたとき、詩が突如「舞い降りてきた」。その場で急いで詩を書き留めた。歳月は流れ、母は現在、あみぐるみ作家として生まれ持った芸術的才能を発揮している。

#6「かぞえしりとりモデル」(2020年11月号)は、読みコレ全11作品の中で2番目に古く、2014年8月末に生まれた。2014年8月といえば、本誌に拙稿「『一対一の勝ち抜き戦』を完成する」の最終回が掲載された月である。そこに私は

$$\underline{\hspace{2cm}} + \underline{\hspace{2cm}} = 863,936$$

という変則的な問題を出した。「整数分割」と呼ばれるもので、足すと右辺の値になる正整数のペアを求めよ、ただしそれぞれの正整数には同じ数字を複数回用いてはならないという縛りのある計算問題である。かぞえしりとりは整数分割のいわば派生商品であり、すんなり開発できた。

#7&8「^{あたかのせき}安宅之関モデル」(2020年12月号・2021年1月号)は、デザインを手がけた私が言うのも妙だが、かなりの“かぶき者”である。ただし、その基礎には“読みコン”こと珠算読上コンクール全国大会があるのであって、決して根無し草ではない。一応の礼儀もわきまえており、安宅之関モデルという名前には、経営学の大家である野中郁次郎・一橋大学名誉教授が提唱した「^{セキ}SECIモデル」への敬意が込められているのである。

剣道二段の腕前で

そろばんを習いに来る子は自分の子

昭和54年度読みコンの模様を収録したビデオの中で、父の西村幸四郎は以上のような紹介を受けて登壇し、読上を実演する。当時、西村珠算塾の生徒は数百名。その中に実の子は二人だけ。なぜに「そろばんを習いに来る子は自分の子」と言えるのかは長年の疑問であったが、最近になってようやく「どの生徒もわが子同然」の意味だと合点がいった。

#9「連唱合奏モデル」(2021年2月号)は、「読上算は音楽である」というメタファー(隠喩)をもとに創造された。このモデルにはさりげないブレイクスルーがあって、それはボーカル兼ソロバン奏者がイヤホンを装着することである。音をよく聞き取るためではなく、音を周囲に漏らさないための工夫である。

#10「珠団方阵モデル」(2021年3月号)は、置き手すなわちソロバン奏者の集まりを交響楽団に見立て、私の母のように珠の響きに魅せられた人たちに鑑賞してもらおうべく企画した。もし各都道府県の代表が一堂に会するならば、置き手は総勢2,209名にもなる。さぞかし壮観に違いない。もちろん47名の読み手にも要注目だ。

#11「^{スパイ・ゲーム}遊偵遊戯モデル」(2021年4月号)は、諜報戦をモチーフとしたダブルスのゲームである。上空から見ると、4人のプレイヤーは斜め正方形◇の各頂点に座っている。この配置は、TVドラマ『スパイ大作戦』の「パ」の字の半濁点が○ではなく◇であることに何となくしたがった。

#12「積和詠算モデル」(2021年5月号)は、高校珠算部の部員たちに対する「創作」のすゝめを論を結んでいる。私は青春真っ盛り的高校生に呼びかけたのだが、メッセージ自体はもっと幅広い年代層へ伝わったに違いない。十代に負けじと創作に取り組む人や、他の誰かの創作に役立てばとの思いから、ネタ満載の手記を公開する人が出てくるかもしれない。ウィズコロナ、そしてポストコロナの時代が「百花斉放」の時代となることを願ってお開きとしたい。

(小樽商科大学大学院教授)